

## マレーシア華文文学の原点 ——方北方作品『ニョニャとババ』論

楊 曉 文

マレーシア華文文学は歴史が長く、作家も作品も多い。中でも方北方（ファン・ペイファン）はマレーシアを代表する華文作家の一人と目されている（これについて詳しくは公仲主編『世界華文文学概要』、人民文学出版社、二〇〇〇年、五〇四～五〇八ページ参照）。本論文は主として方北方氏の代表作である『ニョニャとババ』に焦点を絞り、それを深く分析することによって、マレーシア華文文学とはなにか、その原点はどこにあるのか、といったマレーシア華文文学を論じる際に避けては通ることのできない問題を考えてみたい。

—

本論に入る前に、まず方北方とはどんな経歴の持ち主であるか、言い換えれば彼はどのようにして作家となったかを明らかにしておかなければならないであろう。

方北方氏の本名は方作斌といい、一九一八年に中国の広東省に生まれた。一九二八年、英領マラヤのペナンへわたり伯父の家へ身を寄せて中学に通った。

方氏が小説家を志すようになったのは、方氏が十歳の頃に、生き別れたまま他界した父親の影響が強い。そもそも方氏は両親と共にペナンへわたるはずだった。一九二八年、中国の汕頭からペナンへ向かう船に乗り込もうというときに、難民の雑踏の中で母親の姿を見失ってしまった。父親は、母親を探すためにやむを得ず、方少年一人をペナンへわたらせた。そのとき父親は自分の若い頃の日記を方氏に渡したのだった。中国の母親から父親が病死したという知らせを受け取ったのはそれから、三カ月ほどしてだった。亡き父親を慕って、方少年は父親から渡された日記を幾度も取り出しては読んだ。形見となった日記には、作家になる夢が記されていた。方氏は、父親の果たせなかった夢をいつしか自分の夢とするようになったという。

やがて、中国本土で日中戦争が始まると愛国心に燃えた方氏は、中国へ戻った。一九三七年のことだった。中国では抗日運動のための宣伝部隊に参加した。戦火が広がり、第二次世界大戦が始まると南洋との連絡は途絶えてしまう。それから、第二次世界大戦が終わると、中国に留まって広東省の南華大学で学んだ。しばらくして、方氏のマラヤでの養い親とも言える伯父がなくなり、ペナンへ戻ることにした。

ペナンへ戻った方氏が教職についたことは本書の「日本語版への序文」にも書かれている。このころ戦時期の体験をもとに書いたルポルタージュ『每天死千人的古城』（内容は、毎日多くの人々が戦火に命を奪われていった古都の悲惨な様子を記している）が香港の出版社から出版された。初めて自分の書いた物が本となった喜びで、ペンを執ることにますます熱意を傾けるようになったと回想している。その後も教鞭をとるかたわら、創作を続け今日に至っている。一九八一年に「大馬華文寫作協會」の会長となり、現在は顧問の任に当たられている。また、ペナンの韓江中学校の校長も務められているという。

（方北方著・奥津令子訳『ニョニヤとババ』、発行所・井村文化事業社、発売元・勁草書房、一九八九年、一九九～二〇一ページ）

上記のような著者の略歴から以下のようなことが読み取れる。

第一に、方北方氏が創作を始めたのはみずから進んで文学の道を志すというよりも、その父親の夢を実現させたいという気持ちが強かったことである。「亡き父親を慕って、方少年は父親から渡された日記を幾度も取り出しては読んだ。形見となった日記には、作家になる夢が記されていた。方氏は、父親の果たせなかった夢をいつしか自分の夢とするようになったという」のがそのことを語っている。このような経緯もあってか、方北方氏の作品に登場してくる父親への眼差しは暖かい。その代表作『ニョニヤとババ』の結尾の部分がこのことを端的に示している。

私達は立ち上がった。疲れた体を引きずるようにしてC・S・C コーヒー店を出ようとしたときだった。白髪混じりの老人が店から出てきた。彼は果物の皮や汚い紙屑の入った紙の箱をしっかりと抱えて出口からよたよたと出てきた。道端のごみ捨て場にごみを捨てようとしたとき、突然突風が吹きつけた。老人は不意をつかれて抱えたごみを手にしたまま倒れてしまった。私の前を歩いていた中民はこれを見てすぐに駆け寄った。老人を助け起こして、いたわるようにこう言ったようだった……

「お父さん！大丈夫？」

私には中民が老人のことを「お父さん」と呼んだように思えた。だが、「お父さん」とははっきり聞こえたわけではなかった。途端に好奇心が湧いてきて中民に聞いた……

「だれだい？」

「あの人ですか？ここの雑用をしているんです。僕の父、林ババです。」

「えっ！」中民の答えを聞いて、疲れが吹き飛んでしまった。

（前掲書一九六～一九七ページ）

第二に、マレーシア華文学がけっして恵まれた環境にないことをマレーシア以外の読者はそれを意識して馬華文学（マレーシア華文学の中国語による表現）の作品を読むべきだということである。よく知られているように、マレーシア連邦は三大民族からなる多民族国家であり、人口一九〇〇万人のうちマレー人五〇%、華人二九%、タミル人八%であるが、イギリス人の残した歴史的な問題として実質上マレー人に有利な憲法が作られ、華人にもタミル人にも不公平な政策（マレー人優遇という基本的性格をもつ新経済政策はその典型である）が強いられているのが現実であり続けた。現に、今日の事情もそうだが、とくにマレーシア華文学の草創期においては、種々さまざまな外因により華文教育が制限され（逆に言うと、制限されればされるほど、マレーシア在留の華人が華文に愛着を感じるようになる側面もあることは否めない。華文による創作を志す華人が多かったのも同じ理由による）、マレーシアで華文による作品を公にすることは不可能に近かった。現に、かの有名な方北方氏の「戦時期の体験をもとに書いたルポルタージュ『每天死千人的古城』（内容は、毎日多くの人々が戦火に命を奪われていった古都の悲惨な様子を記している）が香港の出版社から出版された。初めて自分の書いた物が本となった喜びで、ペンを執ることにますます熱意を傾けるようになった」というのが上述したマレーシアにおける華人の文学的営為、作品の出版事情などを物語る。マレーシアで書いた華文作品がマレーシアではなく「香港の出版社から出版された」のは事実であったし、それによってマレーシア在住の方氏が「ペンを執ることにますます熱意を傾けるようになった」のはもちろんその後もマレーシアで華文による創作を続け、その文学的営為による結晶である作品をマレーシア以外のどこかで出版しなければならないことを認識してのことである。

## 二

この章において、方北方氏の代表作である『ニョニャとババ』を対象として論を展開していきたい。

まず「ニョニャ」と「ババ」とはなにか。

中国本土から海外へ出かけそこに根を下ろして何世代もそこで生活するようになった人々とその子孫は華僑と呼ばれている。ただ「華僑のなかで、現地人もしくは中国人以外の女性との間にできた子孫とか、現地におけるヨーロッパ系教育（純粋の現地教育を受けるものは少ない）で育った子弟にあって、中国との紐帯が薄れ中国人意識が希薄になっていったこれらの人たちを、タイでは「ルーク・チーン」(Luk cin)、インドネシアではブラナカン (Peranakan)、ベトナムではミン・フォン (Minh-huong)、フィリピンではメスティーズ (Mestizos)、マレー半島ではババ (Baba) といっている」(『東南アジア=ハンドブック』、毎日新聞社発行、一九七二年、三四六ページ)。これだけでは、バ

バ（そしてニョニヤ）についての説明が不十分であるため、以下、より詳しい解釈を試みよう。

現在のマレーシアでは、マレー文化の影響を著しく受けている中国系マレーシア人を「ババ（男性）」「ニョニヤ（女性）」と呼んでいる。馬場自身も、自分達のことを「ババ」と呼んだり「プルナカン」（マレーシア語で『現地生まれ』の意味）と呼ぶ。そしてババでない中国系マレーシア人のことは「オラン・チナ」（マレー語で『中国人』の意味）「オラン・唐山」（『中国人』の意味）などと呼んで、自分達と区別する。

一般の中国系マレーシアの人々との人たちの違う点として幾つかの特徴があげられる。言葉の上では、家庭で一種のマレー語ともいえる方言を話すこと（一般の中国系の家庭では各々の祖先の出身地の中国語方言を話す、ただし英語教育を受けた両親の家では、どちらの人々も家庭で英語を使う）、食生活の面では、一般の中国系マレーシア人よりも唐がらしのきいた食べ物を多くとる。年輩の婦人はマレースタイルのクバヤというブラウスとサロンを身につけるなどである。しかし生活習慣には個人差があり、唐がらしのきいた食べ物を好まないババもいる。また、繰り返し述べているが、植民地時代はババとそうでない中国人とでは、政治的な意識がずいぶん違った。（後略。前掲した『ニョニヤとババ』、二〇二～二〇三ページ）

こうした「ニョニヤ」と「ババ」についての基礎的知識を念頭において、方北方氏はその代表作である『ニョニヤとババ』においてどのようなニョニヤとババを登場させているのか。言い換えれば、彼はどのようにニョニヤとババを文学化していったのかを考察してみよう。

この作品の女主人公・林ニョニヤは「街の人々から「ニョニヤ」と呼ばれていた。それというのも、林はマラヤで生まれた女の子だったからだ。それで、マラヤ生まれの中国人女性を意味する「ニョニヤ」がそのまま彼女の幼いときの呼び名だった。そして大きくなっても相変わらずニョニヤと呼ばれつづけていたのだった」（前掲書九十五ページ）。まさしく前に援用した「ニョニヤ」の定義を敷衍したような登場人物であるが、前の定義より詳しいかつ文学的に描けたのはその生活環境、ライフスタイル、英語教育などについてであった。

父親の鄭娘衆は、そのころ金持ちになったばかりの商人だった。人の噂するところでは、若いときに廈門から帆船に乗って南洋に渡ってきた後、勤勉だったので身をたてたという。母親は姓を林という。ペナンで生まれ育ち、立派な一族の出だった。

父親は母親の家に婿入りしたので、父親の家庭生活に対する考え方は母親に影響されたらしく、まったく中国的でなくなっていた。一番その変化が分かるのは、たとえば衣食住と、出かけるときの様子だった。林家の一員となってからは父親は中国の服を脱ぎ捨てて白い洋服を着るようになった。家にいるときは必ずサロンをつけていた。毎日の三食はこんなふうだった。朝は必ずコーヒーとクッキー、昼食と夕食には欠かさず、香辛料のきいたカレーとサンバルを食べた。そのうえ箸を使うのをやめて手で食べるようになった。出かけるときはビーズで飾られたサンダルをはき、いつも白い帽子をもっていった。生活様式は全部、母親の影響で南洋化してしまったのだ。

ニョニャは林家のひとり娘だった。両親は掌の中の玉のようにニョニャをかわいがった。それで、ニョニャは一切合切南洋化している環境のもとで育ち、小さいときからやることなすこと、全て、母親を手本にしながら成長した。

(前掲書九十八ページ)

思うに、「ニョニャ」となるには、二つの環境がほとんど決定的な役割を果たしていた。ひとつは生活環境。この小説のヒロインの場合、マラヤ生まれの母親は南洋の風土にはいきり、大陸生まれの父親を次第に南洋化していき、最終的に「中国的でなくなって」いくようにした。このような環境下で生まれ育った林ニョニャが「ニョニャ」となるのはごく自然な成り行きであった。

もうひとつは教育環境。「マレーシアは中国大陸、台湾および香港以外の華文教育が最も進んでいる地域のひとつである」(潘碧華「華文教育与文化伝承—中国現代文学在馬來西亞の伝播与接受」、『世界華文文学研究』第七輯所収、二〇一一年、一ページ)。ゆえに、マレーシアにおける多くの華人家庭がその子女を華文学校へ送るのとは対照的に、英語教育のみを受けさせる選択もあった。

なぜ、英語の教育を受けさせたのだろうか？それには当然いろいろな理由があった。それもすべて、ニョニャが十一年間というものこの家にただ一人の愛娘だったことから始まっている。そしてその娘に英語教育を受けさせたのは、ニョニャに卒業後一流の外資系の会社に入ってもらいたかったからではない。ニョニャが英語教育を修了した後、外資系の会社に勤めている人間に嫁がせたかったからだった。本当にそういう気持ちだったのだ。

ニョニャの母親は心のなかで思っていた。外資系の会社に勤めている中国人は普通の中国人とは違う。中国人は、経営者になれるごく少数の者をのぞけば、大体が苦力の階層だった。だから、母親はニョニャをいいところに嫁がせて楽な生活をさせ

てやりたかった。そのためにニョニヤに英語の教育を受けさせるつもりだった。そのころ、女子でそういう英語教育を受けられるのはごくひとにぎりだった。しかしニョニヤの母親の考え方は西洋化していた。  
(前掲書九十七ページ)

英語か華文か、そのどちらを選択するか(子供にそのどちらの勉強をさせるか)には語学以上の意味があった。大部分のマレーシア華人がその子女に華文を勉強させるのは祖先からの中国文化の伝承をみずからの義務と使命であると感じているからであり、さらにいえばそのことを通して自分達のルーツを確認すると同時に中国人としてのアイデンティティーを確立させる、という形而上の問題・精神的追求でもある。一方、「ニョニヤ」たちに英語教育が選ばれる(それを選ばせる)のは形而下の物質的欲求から出発したことが多い。マレーシア華人の実態を反映するこの作品では「その娘に英語教育を受けさせたのは、ニョニヤに卒業後一流の外資系の会社に入ってもらいたかったからではない。ニョニヤが英語教育を修了した後、外資系の会社に勤めている人間に嫁がせたかったから」であり、言い直せば「ニョニヤをいいところに嫁がせて楽な生活をさせてやりたかった。そのためにニョニヤに英語の教育を受けさせるつもりだった。そのころ、女子でそういう英語教育を受けられるのはごくひとにぎりだった。しかしニョニヤの母親の考え方は西洋化していた」のである。

つまるところ、生活上の南洋化と教育上の西洋化、この二者こそが、「ニョニヤ」たちの本質的特徴であった。

では、「ババ」たちはどうであろう。作者の方北方氏が「ババ」たちのことを意識して構築した「ババ」像——林ババについて考察を加えてみよう。林ニョニヤと再婚しそのもとに婿入りした中国大陸生まれのマレーシア華人・李天福のことをめぐって、林ニョニヤと林ババの意見が対立していたのである。

「ババ! お前は どうして あの人 のことを father って呼ばない だい?」

ババは年からすればもう子供ではなかったが、母がこのことで苦勞していることが全く理解できなかつた。それですぐさま英語で言い返した。

「He is not my father!」

「But, he is my husband!」

ニョニヤもすぐにきっぱりと、天福は自分の夫なのだと英語で弁明した。

「Yes, he is your husband. But he is not my father.

Mother, I don't want to call him father.」

林ババは、母親がどんなに説明しても、こう言い張るばかりだった。

とうとう息子を説き伏せる方法がないと諦めたニョニャはこう持ちかけた。  
「ババや、お父さんと呼ばないというのなら、せめて Uncle とよばなきゃいけないよ。」  
「Uncle！」と林ババは独り言を言った。  
「Yes, call him Uncle.」（「そうよ。叔父さんって呼びなさい。」）  
ニョニャはきっぱりした口調で言った。  
「All right, he shall be my Uncle.」  
李天福は Uncle という言葉の意味が判らなかつたので、ニョニャに意味を説明してくれるよう頼んだ。ところがニョニャも事細かに筋道だつた説明をするわけにはいかないもので、ただこう言うしかなかつた。  
「Uncle は Uncle よ。ババに Uncle って呼ばれたら、お父さんと呼ばれていると思つて返事していればいいのよ。」  
「そうかい、そうかい。覚えておくよ。」天福は妻の言葉を金科玉条のように神聖だと思つていたので、一も二もなくただ感心するばかりだつた。  
ある朝のことである。  
林ババと三、四人の友人達が、道で前からくる李天福に出会つた。とつさにババは避けて行き過ぎようとしたが、天福の方は声をかけて呼び止めた。しかたなくババは英語できいた。  
「叔父さん、僕に何の用？」  
天福はババが一体なんといつているのか全く判らないので、ただフン、フンとでたための返事を二言三言するだけだつた。  
ババは継父がただフンフンと言うのを聞いて、ひどく不愉快な気分だつた。そこで天福を指さしながら友人たちに言つた。  
「He is not my father, he is a Chinese.」  
友人達は皆、ハッハッハッと笑つた。天福も、みんなが笑つたのを見てつられてハッハッと笑つた。だが息子とその友人達が何を笑つているのか、そして自分まで何を笑つているのか、皆目見当もつていなかった。  
（前掲書一三七～一三九ページ）

ここからマレーシアにおける「ニョニャ」と「ババ」の言語事情、いな、彼女ら彼らと地元の華人との言語事情をも垣間見ることができる。「ババ」たちと「ニョニャ」たちは英語しか話さない（話せない。たとえば作中の林ババの場合）か、英語と中国語をちゃんぽんに話す（たとえば作中の林ニョニャ）、のどちらかだ。他方、地元の華人たち、とくに中国大陸からマレーシアへと渡つた華人たちは日常生活のなかでは中国語しか話さない（話せない）ため、両者の間にコミュニケーションが取れていないのが実情

のようだ。現に「友人達は皆、ハッハッハッと笑った。天福も、みんなが笑ったのを見てつられてハッハッと笑った。だが息子とその友人達が何を笑っているのか、そして自分まで何を笑っているのか、皆目見当もついていなかった」。ババたちの嘲笑にせよ、地元華人の天福の苦笑にせよ、結局のところ、互いに意思の疎通をはかることができないがゆえに、真の意味においては両者のどちらも「何を笑っているのか、皆目見当もついていなかった」のである。

「ババ」たちと華人との間における精神的な乖離は言語だけにとどまらない。やはり林ババのケースを例にこれを考察してみよう。

林ババが継父の李天福のことを「He is not my father, he is a Chinese」（前出）とからかったように、「ババ」たちのアイデンティティーについて考える必要がでてくる。では、華人の血筋や家系を引きながら英語教育を受けたマレーシア生まれの「ババ」たちは自分たちを何人だと思っていたのだろうか。

「林ババ、君は何人だい。」と聞く人がいたとしよう。ババは自分はイギリス人だと答えられない。けれどもそんなふうにかれればよくこう答えていた。

「僕の祖国はイギリスさ。」

ババはそれは得意げだった。自分の帰属する国が「イギリス」だと言わなければとても満足はできないし、自分の格が落ちるとでもいうふうだった。それだから、親友が自分の国、中国のことを持ち出すと、決って見下したような口調でいうのだった。

「Countryなんて最低さ。あんな国が祖国なもんか。」

なるほど、中国から渡ってきた同国人達に会ったときのババの態度も説明がつくというものだ。そんなとき、ババは相手を馬鹿にしたような目つきでねめつけ、嘲りながら「中国人」と呼ぶのだった。そして、こうでもしなければ英語を学んだ気高さを示せないとはばかりに言うのだった。

「Mr.Wong, how do you do……」

ところが、外国人と会ったときは襟を正し、ほれぼれとするほど礼儀正しかった。外国人と話すときは、ささやいたり、それは親しそうにする。またある時は腰を低くし、にこにここと笑う。まるで、外国人を尊敬していないとか礼儀正しくないようなことがあっては恐れ多いとでもいうようだった。もしこういう態度をとれなかったら自分のマナーや文明人であることが相手に十分伝わらないのではないか、といったふうだった。

話は戻るが、林ババは中国人を前にすると自分は格が上とばかりに振るまい、外国人の前では自分を卑下する。まるで、英語教育の薫陶を受けてから、中国に出る月

は外国に出る月の丸さや明るさにとても及ばないとでも思っているようだ。道理でこのごろ使う言葉といたらずべて英語ばかりなのも無理はない。それに、中国から渡ってきた「中国人」を馬鹿にするだけではない。ひどいことに英語教育を受けていない二世たちに対してさえも、鼻であしらうような態度をとる。そしてときどき、彼らのことを皮肉って言うのだった……

「ああ、Gentleman とはいえないね。」

(前掲書一五二～一五三ページ)

もともと血筋や家系という角度からいえば、林ババはまちががなく「中国人」である。しかし、彼は中国人であることをいちばん嫌い、「中国から渡ってきた「中国人」を馬鹿にするだけではない。ひどいことに英語教育を受けていない二世たちに対してさえも、鼻であしらうような態度をとる」。なぜ彼はそういう態度をとろうとするのか。よく考えてみる、英語教育を受けた（英語を話せる）、というのがその唯一の理由であるらしい。林ニョニヤが林ババに受けさせた「英語教育の薫陶」は実に語学以上のものをもたらした。その言葉の発生の地、つまりイギリスへと林ババの魂は飛翔し、「僕の祖国はイギリスさ。」というようになる。

ところが、家庭出身からいっても、外見や容姿からいっても、林ババはまぎれもなく「中国人」である。中国人への嫌悪の情を抱くが、自分自身は中国人である。心はイギリスへ飛翔する、体はマレーシアにおける中国人の身である。このジレンマに陥った林ババは奇妙な行動に出、相反する態度をみせるようになる。イギリスを意味する「外国人」に対しては、いわゆる、Gentleman のふり（まね）をする。「外国人と会ったときは襟を正し、ほれほれとするほど礼儀正しかった。外国人と話すときは、ささやいたり、それは親しそうにする。またある時は腰を低くし、にこにこ笑う。まるで、外国人を尊敬していないとか礼儀正しくないようなことがあっては恐れ多いとでもいうようだった。もしこういう態度をとれなかったら自分のマナーや文明人であることが相手に十分伝わらないのではないか、といったふうだった」。他方、中国人を前にしては、別人のように豹変する。「林ババは中国人を前にすると自分は格が上とばかりに振るまい、外国人の前では自分を卑下する。まるで、英語教育の薫陶を受けてから、中国に出る月は外国に出る月の丸さや明るさにとても及ばないとでも思っているようだ。道理でこのごろ使う言葉といたらずべて英語ばかりなのも無理はない」。英語という言葉、それのみによって教育されつづけてきた結果、偽イギリス人になるしかならない林ババはどういう人格の持ち主だろうか。

二重人格という言葉がある。「一人の人間のうちに全く異なる二つの人格があり、それらが交互に全く独立して出現すること」（広辞苑第六版）。この定義からすれば、林バ

バはまさに二重人格の典型だといえよう。というのも、彼においては「外国人を尊敬」「中国人を馬鹿に」する、という相反する態度をつねにとっているのであり、「中国人を前にすると自分は格が上とばかりに振るまい、外国人の前では自分を卑下する」という全く異なる人格が存在しているからである。

すると、林ババのような人間はつまるところ、何人であろう。「香蕉人（バナナ人間）」という中国語がある。皮は黄色だが、中味は白色である。つまり外形や容姿から見れば、中国人（アジア人）にはみえるが、中身は、欧米人（欧米教育）そっくりそのままである。林ババはその一人に数えられよう。

ゆえに、林ババのような「ババ」たちの人格における存在証明はない。厳密な意味では、そういう人間は「中国人」（ここでは「華人」の意味）でもなく、「イギリス」でも無論ない。「香蕉人（バナナ人間）」には自己同一性が見出せず、いつまでたってもアイデンティティーの確立どころか、アイデンティティーの分裂しかないのは「香蕉人（バナナ人間）」の最終的にたどりつくところであろう。

### 三

以上、マレーシア華文学の草分けの一人と目される方北方氏の文学をその代表作中の代表作といわれる『ニョニャとババ』を通して考察してみた。そこから以下のような二つの特質を挙げることができるのではないと思われる。

#### I、リアリズムという創作方法

人物の設定にしても、情景のスケッチにしても、物語の展開にしても、時代背景や歴史的背景の描写にしても、ありのままに写し出すことをモットーとしていることはここまでの論の展開に必要な原文引用から十二分にうかがえることであろう。空想や理想化を排する芸術上のこの立場はこの作品の最初から最後まで通じて貫かれている。もっとも、マレーシア華人の現実を正しく反映するためある程度の非現実的なものが許容された点も注目されたい。方北方氏が手がけた、このような現実主義の創作手段はその後のマレーシア華文学にも受け継がれた。現に、今日のマレーシア華文文壇で活躍中の一人である田農氏が二〇〇六年という時点で声高らかに謳っているのはほかでもなく「堅持現実主義的創作」（リアリズムの創作を堅持しよう）というものであった（詳しくは『当代馬華作家百人伝』、馬來西亞華文作家協会、二〇〇六年、三四一～三四二ページを参照）。つまり、方北方氏の切り開いたリアリズム文学の手法、さらにその精神、伝統は脈脈と続いているのである。

#### II、マレーシアならではの題材着想

戦時中に大陸から押し出されてマレーシアやシンガポールへとやってきた南来作家たちがマレー半島にいながらも中国のことを題材にした作品を発表していた。厳密な意味

において、それらはマレーシア華文学とは言えず、中国文学でもなかった中途半端なものであったかもしれない。そして、一九二〇年代末にマレーシア華文壇では中国の影響から脱却した「南洋色彩文学」が提唱されたり、第二次世界大戦直後に「馬華文学の独自性」をめぐる論争も繰り広げられたりしたが、その「南洋色彩」とはなにか、「馬華文学の独自性」とはなにかが必ずしも明らかにされたわけでもなかったようだ。そこで、方北方氏が登場し、マレーシアならではの題材である『ニョニヤとババ』でもって、そうした不毛の議論にみずからの見解を示したのである。

今日、マレーシアの華文壇において「西馬（西マレーシア）」作家群・「東馬（東マレーシア）」群・「旅台（台湾在住のマレーシア出身の作家たち及びその文学活動をさしいう専門用語。詳しくは『赤道回声』馬華文学読本Ⅱ、万卷楼、二〇〇四を参照）」作家群が鼎立しているのはその実態である。ゆえに、文学主張も美意識も価値観も人生観も多様化しているが、マレーシア華文学の原点に立ち戻って考え直そうという動きはないわけでもない。現に、前述のように、いま活躍中の田農氏は方北方氏をはじめとする馬華文学の先駆者たちが切り開いた「リアリズムの創作を堅持しよう」（「堅持現実主義的創作」）と現実主義なる手法の重要性をあらためて強調している。

また、「旅台」作家群の代表的作家の一人である張貴興は『賽蓮之歌』（長編小説、一九九二年、台北・遠流出版）、『頑皮家族』（長編小説、一九九六年、台北・聯合文学）、『群象』（長編小説、一九九八年、台北・時報出版）、『猴杯』（長編小説、二〇〇〇年、台北・聯合文学）、『我思念的長眠中的南国公主』（長編小説、二〇〇一年、台北・麦田出版）と、熱帯雨林を題材にしたマレーシアならではの作品を発表し続け、台湾における主な文学賞を受賞し、注目を集めている。それらは先輩である方北方が目指したマレーシアならではの題材（『ニョニヤとババ』）を文学化するという方向性を受け継いでの成功と見ても大きな間違いはないであろう。

付記：本稿は平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C 課題番号：23520425）の交付を受けて行った研究成果の一部である。